

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 7日現在

機関番号：34509

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520215

研究課題名（和文） 中世楽書の基礎的研究及び説話伝承に関する研究

研究課題名（英文） A basic research on the medieval “Gakusho” and a study of traditions by setsuwa-denshou

研究代表者

高原 香苗（中原 香苗）（TAKAHARA KANAE (NAKAHARA KANAE)）

神戸学院大学・経営学部・准教授

研究者番号：80469270

研究成果の概要（和文）：雅楽に関する事柄について記した楽書について研究を行った。まず、未紹介の楽書『竹舞眼集』の紹介と内容の検討をし、そこに記される秘伝がどのように受け継がれてきたのかについて考え、論文にまとめた。また、大阪府河内長野市金剛寺蔵の数種の楽書の紹介と内容の検討をし、論文にまとめた。さらに、春日大社に寄託された楽書断簡二葉についての研究発表を行った。

研究成果の概要（英文）：A series of studies was conducted on “Gakusho”, the records related to traditional Japanese court music (gagaku). First, academically untouched volumes of Gakusho, *Chiku-bugansyū*, were introduced and its contents were examined in a research paper, focusing on how the secrets of gagaku had been handed down. Secondly, some research was conducted on several volumes of Gakusho, which are owned by Kongoji temple, in Kawachinagano city, Osaka prefecture. Further, a presentation was given concerning two detached pieces from the original Gakusho which are kept in Kasuga Taisha shrine.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：中世説話文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：楽書、狛氏、春日楽書、竹舞眼集、舞楽府合抄、体源抄、愚聞記、金剛寺

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の状況

近年、日本の宮廷音楽（いわゆる雅楽）をめぐる研究は活況を呈しているといえる。国文学の立場から磯水絵『『源氏物語』時代の音楽研究』（笠間書院、2008）、国史学の立場からは豊永聡美『古代中世の天皇と音楽』（吉

川弘文館、2006）、荻美津夫『古代中世音楽史の研究』（吉川弘文館、2007）が上梓され、音楽史学からは福島和夫『日本音楽史叢』（和泉書院、2007）が公刊された。また、二松学舎大学21世紀COEプログラム（平成16年度～平成21年度）では、音楽をめぐる種々の研究がなされ、その成果である『雅楽資料

集』《論考編》《資料編》(二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム、2006)『雅楽・声明資料集』第二輯(同、2007)『雅楽資料集』第三輯(同、2008)『同』第四輯(同、2009)には、上野学園日本音楽史研究所所蔵楽書の目録、楽書研究、楽人研究、各種索引などの成果がおさめられている。

雅楽とその伝承に関する研究を志すとき、音楽を専業とした楽人によって書かれた楽書に取り組むべきであろう。楽書のうち、中世において特に注目すべきものとしては、鎌倉時代中期の楽人狛近真撰『教訓抄』、その孫朝葛撰『続教訓抄』、室町時代後期の楽人豊原統秋編『體源鈔』があげられる。

このうち、近年『教訓抄』と、狛氏周辺で成立した楽書に関する研究が進められている。『教訓抄』については、先述の二松学舎大学 21 世紀 COE プログラムにおいて、宮内庁書陵部蔵本、曼殊院蔵本などの重要伝本の研究・翻刻が進められ、本文注釈も進められつつある(前掲『雅楽・声明資料集』第二輯、『雅楽資料集』第三輯、『同』第四輯)所収の各伝本の翻刻、ならびに『教訓抄』の注釈、研究など)。

(2) 「春日楽書」をめぐって

『教訓抄』の著者狛近真の属する狛氏は、興福寺に属した楽人で、興福寺の法会などに参仕するとともに、大内楽所においても官位を与えられ、宮廷行事での奏楽を担っていた。狛氏の周辺では、特に近真の前後の鎌倉時代初期から室町時代にかけて、「狛系楽書群」とも総称される多くの楽書が編まれた。

そのうち、「春日楽書」と称される楽書群は特に重要である。「春日楽書」は、『楽所補任』二巻とともに伝存し、『高麗曲』『輪台詠唱歌外楽記』『舞楽古記』『舞楽手記』『楽記』のあわせて五巻が伝わっている。いずれも鎌倉期の書写になるもので、原本が春日大社に所蔵されている。

これら「春日楽書」中の楽書についても、近年研究が進められつつある(〔楽記〕〔高麗曲〕〔舞楽古記〕の研究が『雅楽・声明資料集』第二輯、『雅楽資料集』第三輯、『同』第四輯に掲載されている)。「春日楽書」中の楽書が、狛氏において大きな意味をもっていたと考えるならば、これらについての研究はさらに推進されるべきであろう。

(3) 楽書の生成について

一方、こうした楽書がいかんして生成するか、といった問題について、研究代表者は南都の楽人狛氏周辺で編まれた楽書に着目し、既存の楽書をもととして新たな楽書が作られる、という実態を明らかにしてきた(「秘伝の相承と楽書の生成(1) — 〔羅陵王舞譜〕から『舞楽手記』へ —」(『詞林』44、2008)

「秘伝の相承と楽書の生成(2) — 〔羅陵王舞譜〕から『舞楽古記』へ —」(『詞林』46、2009)。狛氏周辺で成立した楽書について検討することによって、楽書生成の実態をさらに明確にとらえることが可能ではないかと予想される。

2. 研究の目的

(1) 狛氏での秘伝の相承と楽書の生成に関する研究

楽書がいかんして生成するか、といった問題について、研究代表者は前掲論文において、狛近真の記した〔羅陵王舞譜〕と「春日楽書」中の『舞楽手記』『舞楽古記』との関係から、楽書生成の具体的な様相を明らかにした。

同じく狛氏周辺で編まれた『竹舞眼集』を検討することにより、南都における楽書生成の実態をさらに明確に把握することが期待される。

(2) 「春日楽書」の研究

① 「春日楽書」の復元的研究

前述のとおり、「春日楽書」は狛氏にとって重要な楽書であると考えられ、これについての研究も徐々に進められている。

ところが、春日大社に蔵される原本は、伝来の間に流出した部分が多く、現在のものからは、もとの「春日楽書」の姿をうかがうことはできない。

国立公文書館に所蔵される『楽書部類』二十二冊は、江戸初期の「春日楽書」の写本である。これは国史編纂事業に際し、興福寺よりもたらされた楽書が、その価値を認められて書写され、江戸城紅葉山文庫に収められたものである。

『楽書部類』と、その書写の経緯を記した『国史館日録』の記事を検討することで、江戸初期における「春日楽書」の姿を推定する。

② 「春日楽書」断簡の研究

最近春日大社に鎌倉期のものと思われる断簡二葉が寄託された。本断簡は、「春日楽書」中の楽書との関連がうかがわれる。春日大社蔵の「春日楽書」には欠失部分がまま存するが、この断簡二葉は、その欠失部分の一部であるとみられるのである。

これらの断簡と「春日楽書」中の楽書との関連を検討して、それが「春日楽書」中の楽書のどの部分にあたるのかを明らかにし、断簡の出現がどのような意味をもつのか、について考える。

③ 『掌中要録』の研究

「春日楽書」中に、『掌中要録』という楽書が存する。本書は、舞楽の楽譜を集成したもので、鎌倉時代後期の弘長三年(1263)に『続教訓抄』の著者狛朝葛が書写した、との

識語をもち、舞楽の楽譜としては古い部類に属する。また三十曲以上もの舞楽の楽譜を収載していることから、これによって当時の狛氏に伝えられていた舞楽が、実際にはどのようなものであったのかを具体的に知ることができる。

以上の点から、本書は価値の高いものといえる。

しかしながら、本書についてはいまだ研究が進んでいない。本文は『続群書類従』に収められているが、「春日楽書」所収のものとは比べると内容が大きく異なっており、その関係は明らかではない。本書についての研究を進めるには、まずは基礎研究が必要であろう。

そこで、「春日楽書」中の『掌中要録』と『続群書類従』所収本、及び他の伝本の内容を検討し、もともとの『掌中要録』の姿について考える。

(3) 『體源鈔』引用本文の研究

『體源鈔』は、鎌倉時代成立の『教訓抄』、『続教訓抄』とともに、三大楽書の一つとされる楽書である。本書は、音楽のみならず、和歌や仏道・入木道・軍学など種々の方面にまたがる記述をもち、「室町文化の縮図」とも評される、中世の文学・文化を考えるうえで重要な楽書であるといえる。

本書には、多種多様な文献が引用されているが、そうした文献の中には、本文研究上で高い価値を有するもののあることが指摘されている（福島尚「体源抄」所引の「十訓抄」について—受容の様相とその本文研究上の価値—）（『国語国文』57-9、1988）。

そこで、『體源鈔』研究の一環として、『體源鈔』に引用される文献の本文の価値を考えるため、現存本文の多くが引かれている鎌倉時代後期成立の『愚聞記』に着目し、『體源鈔』引用本文の価値について考える。

(4) 未紹介の楽書の発掘、紹介

全国の図書館・文庫・寺社等にはいまだ紹介されていない楽書が存在する可能性がある。そのため、これら楽書を所蔵していると思われる機関などの所蔵典籍の調査をおこない、楽書の発掘、紹介に努める。

3. 研究の方法

(1) 狛氏における芸道の相承と楽書の生成に関する研究

① 『竹舞眼集』の研究

未紹介の楽書『竹舞眼集』を取り上げ、作者と成立、内容について考察する。加えて、そこに引用される書物について検討する。

具体的には、興福寺僧聖宣によって編まれた『舞楽府合抄』と類似した書物と、『竹舞眼集』中に見られる声明譜について考究する。

② 狛氏における秘伝の相承と楽書の生成に関する研究

室町時代に狛正葛によって編まれた『竹舞眼集』に着目する。この編者狛正葛は狛近真の血統に連なる狛氏嫡流の人物であることから、『竹舞眼集』には、狛氏に代々受け継がれてきた楽書の内容が反映していると考えられる。

そこで、『竹舞眼集』に引かれる文献を検討することで、狛氏での芸道の継承にともなうどのような口伝・秘伝がテキストとしてあらわれ、それらのうちどのようなものが重視され受け継がれていくのかを明らかにする。

(2) 「春日楽書」の研究

① 「春日楽書」断簡について

春日大社に寄託された鎌倉期のものとみられる断簡二葉について検討する。これらの断簡と「春日楽書」の内容を比較し、本断簡の位置づけをおこなう。

② 「春日楽書」の復元的研究

林鷲峰の日記『国史館日録』にみられる「春日楽書」関連の記事を検討し、江戸初期の「春日楽書」書写の経緯を明らかにし、その当時の「春日楽書」の姿を復元する。

③ 『掌中要録』の研究

「春日楽書」中に含まれる『掌中要録』をとりあげる。「春日楽書」中の『掌中要録』と『続群書類従』所収本、東北大学附属図書館狩野文庫蔵本などを比較検討し、原『掌中要録』の姿を推定する。

(3) 『體源鈔』に関する研究

『體源鈔』に引用される多数の文献のうちでも、現存伝本の約7割が引かれる『愚聞記』に着目する。『體源鈔』に引用される本文と現存伝本とを比較検討し、『體源鈔』に引用されている『愚聞記』本文の性格を明らかにする。

(4) 未紹介楽書についての研究

大阪府河内長野市の古刹天野山金剛寺に所蔵される音楽資料に注目し、それらを紹介するとともに、内容の検討をおこない、楽書それぞれについて考察する。

4. 研究成果

(1) 狛氏における芸道の相承と楽書の生成に関する研究

① 『竹舞眼集』の研究

『竹舞眼集』は、前述したごとく、室町時代に編まれた楽書である。

本書は、田安德川家旧蔵本のほか五種の伝本が知られるが、日本の古典音楽に関する多くの文献を載せる『日本古典音楽文献解題』（講談社、1987）にも立項されておらず、これまでその存在は広く知られてこなかった。

研究代表者は、本書が狛氏周辺で成立した楽書ならびに狛氏における芸道の相承について論じるにあたって重要なものであると考えた。そこで、本書を紹介するとともに、編者や成立について考察し、内容を検討した。

考察の結果、編者は『教訓抄』の著者狛近真の血統に連なる狛氏嫡流の狛正葛であり、本書には扶助を求めて得られずにいた興福寺に対しての主張も含まれていると推測した。また、本書の目的は、狛氏の正統な伝承を後代に伝えるためであると考えた。

以上の内容は、『竹舞眼集』について「狛氏嫡流の楽書一」（『日本古典文学研究の新展開』笠間書院、2011）に発表した。

②『竹舞眼集』に引かれる書物に関する研究
『竹舞眼集』研究の一環として、そこに引用される『舞楽府合抄』と類同の内容をもつ文献に着目した。

『舞楽府合抄』は、狛近真の死後、家を継ぐのに重要な秘伝等をその子へと伝えるために、興福寺僧聖宣によって書かれたものである。

『竹舞眼集』引用書と現存『舞楽府合抄』とを比較すると、『竹舞眼集』に引用される書は、現存のものとは伝来を異にするものであることが判明した。

すなわち、現存『舞楽府合抄』は近真の三男真葛に伝えられたものだが、『竹舞眼集』引用書は、真葛の兄で近真二男の光葛へと渡され、それが以降の子孫に伝えられたものと推察されたのである。

この考察により、楽人の秘伝を記した楽書が、家を継ぐべき子どもそれぞれに与えられ、それが子孫へと伝えられる、という楽の家の相承と、それにとまなう楽書生成の一端が明らかになったと思われる。

この成果は、「もう一つの『舞楽府合抄』一『竹舞眼集』の引用から一」（磯水絵編『論集 文学と音楽史—詩歌管絃の世界—』和泉書院、2013（刊行予定））にまとめた。

さらに本論文では、『舞楽府合抄』の著者聖宣と関わって、聖宣が伝受した声明譜が『竹舞眼集』に引用されていることをも指摘した。

②狛氏での秘伝の相承と楽書の生成に関する研究

前述のとおり、鎌倉時代以降、南都興福寺属の楽人狛氏周辺で作られた多くの楽書は、家で受け継がれるべき口伝や秘伝などを子孫に伝えるため、芸道を継承していくために

編まれたものと考えられる。

室町時代成立の『竹舞眼集』には、狛氏で代々受け継がれてきたと推される楽書（『教訓抄』、順良房聖宣『舞楽府合抄』等）が引用されている。

楽書は、家に伝えるべき口伝・秘伝等がテキストとして現出したものともいえる。そうすると、狛氏に受け継がれてきた楽書を引用する『竹舞眼集』は、家に伝わる秘伝を集積したテキストであるとも考えられる。

本書の引用文献を検討することで、狛氏での芸道の継承のありようが明らかになるのみならず、芸道において次代に受け継ぐべき重要な伝承が、どのようにしてテキストとしてあらわれ、そして家の中で受け継がれていくのか、芸道の継承とテキスト生成の連関の具体的様相をうかがうことができる。

上記の内容は、「狛氏における家と秘伝の相承—『竹舞眼集』を中心に—」（名古屋大学・比較人文学先端研究特別演習 公開研究集会、2012）として口頭発表をおこなった。

（2）「春日楽書」についての研究

平成22年度中世文学会秋季大会（於県立広島大学）において下記①～③の内容の研究発表をおこなった。発表では、春日大社に寄託された断簡二葉を紹介し、あわせて江戸期の「春日楽書」書写の経緯や「春日楽書」中の楽書の復元案を提示した。

①「春日楽書」断簡二葉について

当該断簡二葉は、ともに卷子本から一紙がはがれたものであるが、「春日楽書」の一部であることが判明した。

一葉は上下巻からなる『楽所補任』の上巻末尾近く、もう一葉は『舞楽手記』の冒頭付近の、江戸初期写本では第一紙部分に相当する。

この二葉分の内容は、これまで「春日楽書」の江戸期の写本により類推するしかなかったが、本断簡の出現により、原本の内容が知られることになった意味は大きい。

②江戸時代初期の「春日楽書」書写の経緯

現在、「春日楽書」は原本が春日大社に所蔵されるが、江戸初期写本と比較すると、まま欠損が見られる。

国立公文書館には寛文六年（1666）書写の「春日楽書」写本である『楽書部類』が存する。それは『本朝通鑑』編纂にとまなう書物収集の際に見出され、その価値の高さから書写されて江戸城紅葉山文庫に収められたものであった。

『楽書部類』により、江戸初期の「春日楽書」の姿を類推することが可能である。この発表では、幕府による「春日楽書」書写の経緯と、その当時の「春日楽書」復元案を示し

た。

③『掌中要録』に関する考察

「春日楽書」中の『掌中要録』は、『続群書類従』管絃部にも収められているが、「春日楽書」と『続群書類従』所収本とでは、内容が大きく異なっている。これらと『掌中要録』の現存伝本等を比較し、原『掌中要録』の姿を推定した。

以上の研究は、現在進展しつつある「春日楽書」研究に資するものといえ、今後の研究の進展をうながすものとなり得ると考えられる。

(3)『體源鈔』に引用される書物についての研究

『愚聞記』は、鎌倉時代成立の楽書である。室町時代末期成立の中世最大の楽書『體源鈔』には多数の書物が引用されるが、『愚聞記』は現存本文の約7割が『體源鈔』に引かれる点で注目される。

『體源鈔』所引本文と現存本文とを検討した結果、『體源鈔』所引の『愚聞記』は、現存本よりも多くの記述をもつ、原『愚聞記』の姿を推測させ得る重要なものであることが判明した。

この成果は、『體源鈔』所引の『愚聞記』について(『日本文学』、61巻3号、2012)にまとめた。

これは、『體源鈔』が、そこに引用された書物の本文研究上有益なものであることを指摘したものである。

(4)未紹介楽書の研究

大阪府河内長野市の天野山金剛寺に蔵される典籍のうち、音楽に関わる資料六点(『諸打物譜』[琵琶秘抄][笙楽譜・金剛寺楽次第][打毬楽][箏築譜][楽譜断簡])の紹介・検討を行った。これらの音楽資料は、以下に記すように、いずれも日本音楽史ないしは日本文化史上重要な価値をもつ貴重なものといえる。

『諸打物譜』は、金剛寺第十三代学頭禅恵(1284—1364)によって編まれたものである。ここには、これまで知られていなかった住吉社での音楽伝承をうかがわせる楽譜類が記され、また真源真作と推される『順次往生講式』の草稿的本文も見られる。したがって、本書は日本音楽史上重要な価値を有するといえる。

『琵琶秘抄』は、室町時代後期から江戸初期に成立したものであるが、ここに記される本朝への琵琶伝承を語る説話は、琵琶道継承の際に伝えられる「口伝」の世界がいかなるものか、その一端をうかがわせる興味深いものである。

〔笙楽譜・金剛寺楽次第〕は、金剛寺第五十四代学頭の真景房海琳(1680—1745)が、元禄十二年(1699)に書写したものである。本資料は、当時金剛寺で行われていた音楽を伴う法会の実態をうかがい知ることのできるものであると同時に、金剛寺において音楽がいかに重視されていたかを示していると思われる。

残る『打毬楽』[箏築譜][楽譜断簡]はそれぞれ楽譜である。このうち[箏築譜]は早い時期の仮名譜として貴重なものである。

この成果は、「金剛寺聖教中の音楽資料について」(『真言密教寺院に伝わる典籍の学際的調査・研究—金剛寺本を中心に—』2011)に発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 中原香苗、『體源鈔』所引の『愚聞記』について、日本文学、61巻3号、pp72-76、2012
- ② 中原香苗、金剛寺聖教中の音楽資料について、真言密教寺院に伝わる典籍の学際的調査・研究—金剛寺本を中心に—、pp17-52、2011

〔学会発表〕(計2件)

- ① 中原香苗、狛氏における家と秘伝の相承—『竹舞眼集』を中心に—、名古屋大学・比較人文学先端研究特別演習 公開研究集会、2012年12月23日、名古屋大学
- ② 中原香苗、新出の楽書断簡二葉について、中世文学会、2010年10月24日、県立広島大学

〔図書〕(計2件)

- ① 中原香苗(磯水絵 編集)、和泉書院、論集—文学と音楽史—詩歌管絃の世界—、2013(刊行予定)、544(pp243-269)
- ② 中原香苗(伊井春樹 編集)、笠間書院、日本古典文学研究の展開、2011、516(pp385-414)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高原 香苗(中原 香苗)

(TAKAHARA KANAE(NAKAHARA KANAE))

神戸学院大学・経営学部・准教授

研究者番号：80469270

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし